「身近な「水」を考える」

岐阜県　大垣市立赤坂中学校
二年　長澤奈央

私の住んでいる地域には「大谷川」という川があります。そのため、小学校では、川に関連した総合学習を進めてきました。水質調査のためのカワゲラウォッチング、川の中やその周囲の清掃活動など、川の環境が少しでも改善されるよう努力したり、川が汚れるのはどうしてなのか、又、どうすることできれいな水が流れる川にできるかということを考え、話し合いました。

中学校に入学して少したった頃、一年生全員で「中山道ハイク」というものをしました。それでの行き先は、中山道草津宿、醒井宿。特に醒井宿は、「きれいな水の流れる川がある」と聞いていたので楽しみにしていました。

そして当日、草津宿での見学を終え、醒井宿に移動した私は、その光景を見て、驚きを隠すことができませんでした。

「川がこんなにきれいだなんて…。」

醒井宿を流れる川には、澄みきった水が流れ、川底には、本当にきれいな川にしか生えないと言われている「バイカモ」という花がゆれていたのです。

それだけではありませんでした。町の各地には湧水があふれ、いつでも水が飲めるようになっていたり、特産の「水」を生かした産業も盛んに行われています。

しかし、醒井宿に住む人々は、そんなに特別なことをしているわけではありませんでした。近所の方にお話を聞いたのですが、その時も

「私らはなんも特別なことはしとらん。ただな、昔からずっときれいなままで流れてきた川やから、私らが汚してしまうのは申し訳がつかん。だから、年に２回の清掃と、川にごみを捨てないようにしとるんや。口で言うのは簡単やけど、ほんの少しのことですぐだめになってしまうのが川やでな。」

と話して下さいました。

学校に戻り、私は自分の校区の青墓、赤坂のことを考えてみました。醒井の水がきれいなのは、住む人全員が「水」を考え、大切にしていっているからだから。じゃあ、私が住む地域ではどうなのだろう…と。

赤坂を流れる杭瀬川では、ホタルの住む川のためにいつも清掃活動をしている地域の団体があるそうです。毎年見られるホタルは、多くの人が楽しみにしていて、わざわざ遠方からも見に来る人がいると聞きました。青墓を流れる大谷川にも、同じようにしてホタルが飛ぶ時があります。なぜなら、二つの川とも「それなりに」きれいだからです。

そのことを感じた私は、「本当に」きれいな醒井のような川にするにはどうすればいいのかを本気で考えました。そして、今のままでは足りないものがあることに気付いたのです。「住む人一人一人が協力しなければ」と。

醒井では、住んでいる一人一人に「水を大切にしていこう」と思う気持ちがありました。しかし、青墓や赤坂には清掃活動を行っていることすら知らない、自覚のない人が多いのです。今の状況を変えるのは、他ならぬ私達なのだから。

「大切に守っていく」のは、私達しかいないのだから、まず「今」のことをみんなに知ってもらいたいです。

それは、「水の都」と言われる、大垣市全体のことでもあるのではないでしょうか。今のままでは、ただ地下水が豊富にあるということだけで、本当の水の都とは言えないのではないかと、私は感じているからです。

水は私達の身近にあります。だからこそ、「自分達が汚している」という事実に気付くことが出来ないのではないでしょうか。私は総合学習や醒井の人々から学んだように、足りないのは「ほんの少しの自覚」だと感じています。ほんの少しでも、その分良くなっていくものはあると思うのです。だから、まず自分から積極的に清掃活動に参加して、いつか本当にきれいな川を取り戻したいです。

「水は当たり前のものではない」

岐阜県　岐阜市立伊奈波中学校
二年　渡　邊　千　裕

平成十四年八月。私は、小里川ダムの底に沈むという場所の見学会に、家族と一緒に参加しました。見学会では、普段の生活で使っているような道を通り、ダム本体を見に行きました。その途中には、橋や水路、お地蔵様などもあり、「あぁ、ここに人が住んでいたんだな。」と思いました。

見学の後、私たちが帰ろうとしていると、「最後に、家のところを歩けて良かったね。」という声が聞こえました。きっと、ダムの底に沈む地域に住んでいた人だったのでしょう。その時、私はハッとしたのを覚えています。

ダムはつくることによって、水をためることができます。また、洪水から町を守ることができます。そんな便利な点ばかりに目がいって、私は一つ、大切なことを見落としていたのです。それは、その場所に住んでいた人の思いでした。おそらく、誰一人として、自分が慣れ親しんだ地から、喜んで離れていった方は、いないでしょう。けれど、最後には水の大切さを思い、ダムを利用する多くの人のことを考え、離れる決心をされたのだと思います。しかし、きっとその胸中では、「できることなら、この地に住み続けたかった。」という気持ちだったのだと思います。

そして今、小里川ダムには、たくさんの水がためられており、洪水調節の役割を果たしています。

私たちの住む岐阜市では、長良川の伏流水を水道水として利用しています。そのため、他の地域に比べ、おいしい水を飲むことができます。それは、川の上流にいる方が、水を汚さないようにされているおかげです。もし、川の上流部で水が汚れてしまったら、私たちは使う水がなくなり、生活していけなくなってしまいます。

水源地に住む人々は、水の尊さを生活の中で知っています。そのため、水を大切にしていて、それで下流の人も、安全できれいないい水を飲むことができるのです。

私は、水について詳しく知るまで、蛇口をひねれば水が出てくることは、当たり前だと思っていました。そして、平気で水を出したままにしていました。さらに、平気で食べ残しを、たっぷりの洗剤で洗ったり、飲み残しをそのまま流したりしていました。

しかし、本当は、当たり前のことではありませんでした。ダムをつくるために、それまで住んでいた場所を離れた方々がいました。また、川の上流には、川を汚さないように努力する方たちもいました。こうした方々がいないと、私たちは水を飲むことさえ、できなくなっていたかもしれないのです。

今、生活排水による河川の汚染が問題になっています。その水を汚している張本人は、工場やどこかのだらしのない家庭ではなく、私たち一人一人なのです。私たちは、水源地に暮らす方々や水を守るために働く人々など、多くの人の様々な思いを何一つ考えずに、水を無駄に使い、当然のように汚水を流しています。けれど、これだけ盛んに環境問題が叫ばれるようになっても、多くの人は気付いていません。自分自身が、水を汚しているのだということに。

ところで、このような状態をダムに沈んだ地域にいた方々は、水を大切に守っている方々は、どのように受け止めていらっしゃるのでしょうか。自分の思いを踏みにじられたような気持ちではないかと私は思います。

水を汚さないために、どんなことをしていけばいいのでしょうか。専門的なことは分からないけれど、自分のすぐ近くにある水のことを、真剣に考えてみることはできると思います。そして、その中で水に対するたくさんの人の思いに触れ、水の大切さが分かったならば、水を守ることにつながると、私は思っています。

「命の水、水の命」

兵庫県　三木学園白陵中学校
三年　北口千裕

「地震の時は水が出なかったんですよね。でも、ここでは水道が使えるから、まだ助かりますよ。」

昨年、台風２３号による水害のボランティアとして豊岡を訪れた時、地元の方が最初におっしゃった言葉だ。阪神淡路大震災を経験した私に気をつかってくれているのを感じて心苦しく思ったものの、私にはまだその言葉の本当の意味が分からなかった。

建物の壁には私の胸よりも高い所に、水がきたことを示すような筋が入っている。わらくずや泥などさまざまな物を身にまとっている木々は、黙って立っているだけで水の恐ろしさを伝えている。そして、つい先日まではにぎやかであったろう鶏舎は、今はひっそりとして、そこからは何も音が聞こえてこない。「水がこのように大きな被害をもたらしたのに、なぜ水をありがたがるのだろうか。」私の感じた疑問であった。

私は中学生なので、民家の清掃が担当となった。ある年輩のご婦人の家に着き、さっそく作業を始めた。

「ここをふいてくださいね。」

まずは、水をかぶった部屋のふき掃除だ。たまった泥などは大方取り除かれていたが、床にも、柱にも、壁にも、家具にも泥はこびりついている。部屋全体がほこりっぽくて、マスクの着用をすすめられたほどだ。

早速、雑巾を持って、こびりついた泥を拭っていく。ひとふきで雑巾は真っ黒になる。乾いてこびりついた汚れはなかなか取れない。雑巾をゆすぐバケツの水も、すぐに交換が必要になる。何度も水道に向かい水を交換する。作業を進めるうちに、「本当にきれいになるのだろうか」と思われた部屋が、徐々に元の姿を取り戻してくる。きれいになってくると、それがうれしくて、ふき掃除をする手の動きが速くなる。一緒に掃除をしている人たちの顔にも笑顔が見えてくる。

「これを洗ってくださいね。」

家財道具は水をかぶり、そのままでは使えない状態だ。ひとつひとつ丁寧に洗っていく。

元の輝きを取り戻していく部屋や品々を見ながら、震災の時の記憶が甦ってきた。遠方から家族みんなで協力して水を運んだこと。その水で母が私の汚れた顔をふいてくれたこと。その横には、大阪からペットボトルをいっぱい抱えて来てくれた叔母がいた。水道が出ない状況を経験した時、水がとても貴重であること、水が命を支えていることを痛感した。「早く水道が出るようになってほしい。」これは、震災後のみんなの願いであった。

ボランティアセンターに戻り、水道の水で道具を洗い、うがいをしながら私は思った。「これなんだ。これが水の力なんだ。」

人間の生活は、常に水と共にある。農業など水の力を借りている面もあれば、水害・干害など水に痛めつけられる面もある。長い歴史の中で、人は水と闘い、水に感謝し、水を愛で、水と深く関わりながら、それぞれの文化や知恵を育んできた。水は様々な命の源である。

円山川沿いに住む人々は、たくさんの水の恵みを得ながら生活してきた。だからこそ今コウノトリが大空をはばたこうとしている豊かな土地がある。確かに水に痛めつけられる時もあろうが、水の力を活かして立ち直っていくであろう。水に支えられた豊かな土地だから『豊岡』なのである。

私は冒頭の言葉が、けっして私への気配りだけで出たものでないことをはっきりと理解した。

西宮市に帰った時、真っ先に水道の蛇口をひねった。流れ出る水を口にした時、今までは少々カルキ臭く感じられていた水が、とっても爽やかな口あたりに感じられた。普段は当たり前のように使っている水。このように水が自由に使えることの素晴らしさを常に意識しながら、水の命を大切にしていきたいと思う。

「命の水」

山口県　周防大島町立大島中学校
二年　藤井絢子

瀬戸内海三番目の大きさを誇る私の故郷、周防大島。山と海に囲まれて何不自由なく平和に暮らしている私達ですが、その歴史を辿って行くと、「水」を巡り先人達の英知と苦労がそこにあったという事を思い知らされました。

古くから、大島は水量の少ない瀬戸内海式気候で、干ばつ地域特有の深刻な水不足に悩まされていました。そして、長年治水ダムの建設が渇望され、平成になってようやく待望の「屋代ダム」が建設されたのです。お陰で、水不足の心配をする事もなくなりましたが、そのダム建設においては干ばつだけでなく、過去にもう一つ大きな深刻な問題を抱えていたというのです。

明治十九年に「屋代村郷之坪大洪水」が発生しました。屋代ダムに行く途中に何気なく郷之坪バス停留所の近くに建立されている石碑に目が留まり、一体ここで何があったのだろうかと町立図書館に行ってあらゆる資料を調べてみたところ、当時、連続的な豪雨の為、東屋代の谷山の地盤が弛緩し瞬時にして炸裂崩壊し、土砂岩石を混えた濁水が飛来して死者百十人、行方不明者七人にものぼるという大災害をもたらしたそうです。屋代ダムは、この大洪水からも私達の生活を守ってくれているのです。

「災害は忘れた頃にやって来る」という言葉がありますが、私は改めて屋代ダムが完成した事により何時起こるか分からない災害から安心して送れる生活に感謝しながら、また限られた資源を大切に有効に使っていかなくてはならないという認識を得る事が出来ました。干ばつ、大洪水から生活を守る事はもちろんの事、屋代川を流れる水は軟水で各家庭の水道の蛇口からもおいしくて豊富な水を供給してくれていました。確かに水不足は深刻で、今では広島県の弥栄ダムから水を引いてもらっていますが、水が私達の命の源となっている事は間違いなく、水のない生活なんてとても考えられません。

昨年の九月、超大型台風十八号により、私の住む屋代地区では水も電気も、おまけに電話もしばらくの間使えなくなるという事態が発生しました。普段何不自由なく暮らしていた私は、この時ほど水の有難さを感じた事はありません。水が出ないのに、学校給食の代わりにお弁当持参という最悪の場面に出くわして途方にくれていたところ、小松地区がいち早く電気も水も使えるようになったという情報をキャッチして、小松地区に住んでいる祖母の家に世話になりに行きました。しかし、一日目、二日目、三日目と日が経つうちに皆のストレスが溜まって行き、疲労感が増してくるのが目に見えるようで、やっと家の蛇口から水が出た時の嬉しさは今でも忘れてはいません。

水は、私達の生活において空気と同じようになくてはならない存在になっています。しかし。ある時は干ばつで農作物が不作になり食料難に苦しめられ、又ある時は大洪水により一瞬において何人もの命を奪ってしまう恐ろしい水。人間だけに限らず地球上の動物、生き物全ての命の源になっている水。限られた資源だからこそ、厳しい自然現象の中で上手に使いこなしていかなくてはいけない。それが、水と共に生活している私たちの永遠の課題ではないでしょうか。

誰もがそうであるように、私も自然豊かな周防大島が大好きです。今、自然の中で生かされている自分がいるということ、先人たちの英知と苦労の上に今の自分がいるということを改めて認識し、大好きな自然を大切に、そしておいしい水に恵まれた今の環境に感謝しながら命の水との生活を大切にしていきたいと思います。この屋代川の水がいつまでも清く次の世代へと繋がっていくことを切望します。

「私の宇内川」

山口県　下関市立豊田西中学校
三年　肥　中　優　実

一口に水と言っても、蛇口から出てくる水、海、田の水など、それぞれ違う性質をもった色々な水があります。けれど、「水」と聞くと、私は小学生の頃によく遊んだ川のことを思い出します。自然に囲まれたこの町で育った私は、少しずつ変化していく景色の中の水を見つめてきました。

その川は私が通った小学校の敷地の中を流れています。よく友だちと遊びに行ったものです。川に入るためにわざわざ水着をもって行ったこともありました。

私が初めてこの宇内川で遊んだのは低学年の頃の生活科の授業でのことです。夏といってもやはりまだ少し冷たい水に足をつけ、恐る恐る、でもはしゃいで前へ進んでいきました。深い所や足場の悪い所があったり、タニシのたくさんいる所など、川には特徴のある箇所がたくさんありました。そこで、私たちはそれらの場所に名前をつけていくことにしたのです。苔が生えている大きな岩は「苔のすべり台」、三つ仲良く並んだ岩は「三つ子島」……。低学年の頃の少ない記憶の中で、こうした川での思い出は、今でも鮮明です。

もう一つの宇内川の自慢は、夏になるとホタルに出会えるということです。それは友だちの間でも有名でした。私は夜に外出することができませんでしたが、「きれいだよお。」という友だちの話を聞く度、一度夜の川へ行ってみたいと思いを募らせました。

そんなある日、家族で祭りに出かけた帰りに、ついにホタルに会うチャンスが訪れたのです。しかし、私はホタルを見つけることはできませんでした。そこには確かにホタルがいたのでしょう。けれど、私は、小さくてかわいいホタルの光を見ることはありませんでした。私が見たものは、あたり一面に広がる眩しい輝きだったのです。そうです、それは無数のホタルの光です。

あの時に見た、あたりが黄緑色の光でいっぱいになった光景は、私の中でふるさとの自慢と一生の思い出になっています。ホタルの光を見つけたときの喜び、安らいだ心。それらはとても小さいことだけれど、今の私を作っているものの一つであることは確かです。

最初にホタルを見たときからもう六年がたちます。その間も私のホタルへの思いは何も変わっていません。けれど、ホタルを取り巻く環境は大きく変化しているようです。

昨年のことです。私はまたホタルを見るために宇内川へ出かけました。けれど、あの時に見た「輝き」どころか、一匹のホタルさえ見つけることはできなかったのです。

それには川が変わったことが関係していると思われます。宇内川は濁っていることが多くなりました。あれほどたくさんいたタニシや魚の数は激減しているようです。そしてこれは人間の勝手から起きています。ゴミがよく捨てられるようになったのです。プールの薬が間違って川へ流れる事件もありました。洗剤の泡を見ることもあります。人間は自然を求めてあちこちを旅行するのに、その一方で、身近な自然を破壊しているのです。

私は、残念です。そして、自分に何ができるか考えています。それは決して難しいことではないはずです。「ゴミを捨てない」とか「自然に生息する生物を傷つけない」とか、そんな当たり前のことなのですから。他の人たちにも考えてほしい。そうすれば、もっとふるさとの自然に愛着をもてるようになると思います。私たちはほんの少し怠けただけなのだと思っています。私がしなければいけないことは、川にゴミを捨てた人を探し出すことではありません。宇内川を愛することです。

私は私を育んでくれた宇内川の思い出を大切にしたいです。だから守っていきたいと思うのです。そうしたら、ホタルの輝きをまた見られると信じています。今年も、私は宇内川へホタルの光を探しに行きます。

「今、私にできること」

徳島県　美馬市立穴吹中学校
二年　村上睦実

私の町には、四国一の清流「穴吹川」がある。上流から北へ下ると穏やかな流れにであう。足を浸してみると、その冷たさと心地よさに思わず笑みがこぼれる。「美しい」という言葉だけでは到底、表せそうにない。この地を訪れるたくさんの人にやすらぎを与え続ける水。その透き通った水の中からは、泳いでいる小さな魚さえも見える。この川は私の町の誇りだ。

去年の夏、都心から親戚がやってきたので一緒に穴吹川へ行った。その日も、各地から来たたくさんの人で川原は溢れかえっていた。そこで私たちは眺めの良いところにテントを張り、バーベキューをした。川の浅いところに石で囲いを作って、スイカを冷やした。小さい子たちはとても楽しそうに石投げをしたり、泳いだりして遊び、大人の人は釣りを楽しんでいた。目を閉じると、川のせせらぎの音と子供達の歓声が聞こえ、私はとても優しい気持ちになった。

「東京には、こんなきれいなところは無いんだよ。汚い水ばかり。来られて本当によかったよ。疲れが取れた。ありがとう。」

と、親戚のひとりが言った。「川ってすごい。」と思った。ただ、美しいだけではないのだ。カラカラに乾いた人々の心に癒しと潤いを与えてくれる。

穴吹川がきれいな理由を考えてみた。年に何度か小中学生が水質検査をし、川の実情を把握、理解する取り組みが行われている。私も、小学生の頃から総合的な学習で、穴吹川の環境問題についていろいろと学んできた。自分達の川をよく知ることによってその大切さを再確認し、生活排水を川に流したり、ゴミを捨てたりしないことを心がけるようになった。

毎年、夏になると川原にはたくさんのゴミが落ちている。その度、必ずといってよいほど誰かが大きなゴミ袋を持って一生懸命に拾っている。だから、川は絶えずきれいだ。地元の人たちは本当に穴吹川を愛している。一人ひとりなら小さなことでも町の全ての人が続けると大きな成果となる。その努力の結晶が、今の穴吹川だ。

水の惑星、地球に生まれてきた私たちの先祖は、水を引き、田畑を耕し、文明を発展させてきた。では、遥か昔から人々が絶やすことなく利用し続けた水を、このまま使い続けるとどうなってしまうのだろう。

蛇口をひねればいつだって安全な水を得られる日本。世界的に見れば、水はきれいなほうだが、今、各地の川は確実に汚れてきている。人間は水を汚してばかりだ。

また、水は農作物のための大事な資源であり、人間が生きていくために最も重要だといえる。「生きるため」なら水を汚してしまってもよいのだろうか。貴重な資源を、無駄に使ってしまってもよいのだろうか。

それは絶対に違う。私が生まれるずっとずっと前から人々が守り続けてきた水を、私たちは絶対に汚してはならない。そのために、水が抱えている問題を知ることと、そういった資源には限りがあるということを常に意識していくことが大事である。

それでは、私にできることは何だろうか。まず、水を大切にすること。例えば、お米の研ぎ汁を観葉植物の水やりに使ったり、お風呂の残り湯を拭き掃除に使いまわしたりもできる。それから、水だけでなく、全ての環境問題、特にゴミ問題に取り組むこと。自分が出したゴミには責任を持つ、正しく分別してゴミを出す。ゴミ拾いなどのボランティア活動に参加するなど、小さなことだけれど積み重ねていきたいと思う。

私たちは生きてゆくために水をきれいにしていく。青く美しい地球を、川を、水を受け継ぎ、後世に伝えていかなければならない。まだ見ぬ未来のために、これからもずっと。

「未来との約束」

愛媛県　今治明徳中学校
二年　三宅川　和賀子

ざあざあ、ばしゃばしゃ。私は川で泳ぎながら、考えた。「まだここにも、こんなに澄んだ川が残っていたんだ」と。川というより渓谷という感じだ。広葉樹の木の葉の影が川面に映り、水しぶきに揺らいだ。その時、ふと寂しさに襲われた。この前ＴＶで見た世界的な水不足のことが頭に浮かんだのだ。水不足に苦しむ人のことを考えた。

今発展途上国では水関係の病気で、子供たちが八秒に一人ずつ亡くなっている。この瞬間にも小さな命の火が消えかけている。十二億の人類の五分の一が安全な飲料水の確保ができないでいる。日本で不安なく暮らせることは水に恵まれた幸運によるものだ。しかし、豊かな暮らしは明日にも終わるかもしれない。中国では北部の湖や黄河は干上がり、砂漠化が始まった。その湖や北京周辺は穀物生産の割合が高いが、二十年後は生産不可能になるだろうという。穀物の輸入に頼る日本は食料をどう確保するのだろう。私たちはよく食べ物を残し、無駄にする。でも米一キロ作るのに水が一・五トン、牛肉では七トンの水がいる。つまり肉や穀物を食べることは、水を消費すること。食料の輸入国は水の輸入国なのだ。生活を見直さねばならないはずだ。

自然と一体となった生活のレベルの高さが世界でもよく知られているのが、環境先進国ドイツだ。ドイツを流れる父なる川、ライン。六十年代、生息する魚の種類の激減により、八十七年に周辺諸国と協力して対策を立て、十五年でほぼ回復した。

そして、ドイツではビオトープという生物の生活環境づくりが盛んだ。真っ直ぐの川にカーブやよどみを作る。さらにコンクリートから樹木での護岸に変える。すると草花や昆虫、鳥などの生物が集まる。もちろん人間も。

ドイツの環境保護の特徴は、若い人たちが率先して取り組むこと。それがドイツ政府の対策の原動力なのだ。日本は行政任せで正反対だ。失われてゆく自然を見ているだけでは動物も森も水も帰ってこない。ドイツ基本法に「次世代のために自然を守る責任がある」とある。私たちはまだ残っている自然を守り、回復させていく義務があるのだ。私の祖父の頃には、家の前の川にカワウソがいた。父の頃は、アユ。私が大人になった時、この父の川で見いだせるものは何だろう。背丈の倍もある雑草や拾いようのないゴミ。数センチとはいえ、台風の時には溢れかえる水。同じ過ちは二度と繰り返さない。私に感動を与えてくてた、あの川を、澄んだ水を、未来の空に届けたい。

二〇二五年には、世界人口は八十億人になると予想されている。八十億の人々に安全な水を平等に供給することが、私たちへの課題だ。そのために各国で地球と水の治療が行われている。何より大切なのは、私たち一人一人の毎日の生活と、地球全体の働きかけによって、必ず未来は変えられる。世界中のビオトープは、いかに小さくとも地球の理想の姿ではないだろうか。私たちは地球とのつきあい方も、自然への親しみも、いつのまにか過去に置いてきてしまっていたようだ。

人の体に血液があるように、この星にも海や川が流れ、ちゃんと生きている。しかし、人は環境や生物のバランスを崩し始めた。私たちは地球と生きている。だからそこに住む人類にも当然、危機が迫っている。地球は弱っているのに、人間だけが今より豊かな文明を築くことはありえない。

私は未来の続く限り、日本の自然の姿を残したいと願う。私の力でどこまでできるかわからないが、青い地球の水を枯らしてはならない。地球を悲しませてはならない。少しでもそのために貢献していきたい。

私は見たい。雄大な青でいっぱいの大地と、幸せな命の真の姿を。そこには輝く水があるのだ。

「優しい水だな」

長崎県　佐々町立佐々中学校
一年　南部　由梨絵

「水は…。」

あなたなら、この続きは何といいますか。「おいしい」「青」「大切」「命の元」などいろいろな言葉がありますが、私は、「きれい。」と言います。

山から流れ出る自然の山水は飲むことができるということ、海に行くと、思い切り泳ぐことができるということなどから、「水はきれい」と私は答えます。海に行って、もし水を飲んでしまっても平気ですし、さらに、体にいいからと言って、山水をくんできて、山水だけを飲用している人もいるくらいです。

しかし、最近では、私たち人間がこのような飲むことができる水を飲むことができない水にしてしまっています。川へのゴミの投げ捨て、洗剤の使い過ぎによる生活排水の汚染などが、その大きな原因の一つです。ゴミの投げ捨てはいけないこと、洗剤の使い過ぎはいけないこととわかっていても、「面倒だ。」「たいしたことじゃない。」と、してしまう人が増えているのではないでしょうか。そんな人が増えていくことで、生き物（人間も含めて）が住みやすい、きれいな川や海は数少なくなってきています。このままだといつかは、飲むことができる水や安心して泳ぐことができる水がなくなってしまうのではないでしょうか。

私にとって、もう一つ違う意味で水は、大切で、今の私にはなくてはならないものです。私が大好きな水泳は、水がなかったらできません。さらに、少しでも水がにごってよごれていたら、いやなにおいがするし、すぐに目が痛くなります。泳いでいる時に前がはっきりと見えたら、なんだかうれしくなるし、その日の調子も良くなり、「あっ。今日の水はきれいで、軽いな。」と、一気にタイムが上がっていきます。そんな時には、

「水が手伝ってくれてるのかな。」

「今日の水は優しい水だな」

などと、思わず、水に感謝してしまいます。屋外のプールの水になると、水の状態はその日、その場所によって、大きく変わります。六月頃のプールは、まだ水は青色で透明感もあり、泳いでいて、とても気持ちいいです。二年ほど前、九州大会で隣の県のプールで大会がありました。それは、九月末の、屋外プールである最後の大会でした。行ってみると、そのプールの色は緑色でした。「九州大会なのに」と心の中で思いましたが、今考えると、それだけ、「水を、きれいな状態にしておくということは、たいへんなことなんだな。」と、思っています。

世界的に見て、森林が伐採され、その木の下にたくわえられていた地下水が減少しているというニュースをよく聞きます。また、世界が砂漠化しているということも、よく新聞などで見ます。そんな今、この地球に生きている生き物のリーダーである人間が、もっと「水」について考えなければならない時に、なっているのではないでしょうか。飲むことができる水がいつまでも飲むことができる水であるように、一人一人が「水がきれいであるためには…。」と考える必要があると思います。私たち中学生にできること、それは、ゴミの投げ捨てはしない、石けんや洗剤を使いすぎて、生活排水を汚さないことなどが考えられます。このことを、毎日の生活の中で心がけて生活していくことが大切だと思います。そして、私の家族が、私たちの町に住む人が、日本に住む人たちが、世界の人々が、生活の中でこの二つのことだけでも心がけてくれたら、水は、きれいになっていくのでは、ないでしょうか。そうすれば、ほとんどの人から「水は…。」に続く言葉が「きれい」と、返ってくる日も近くなるでしょう。

「優しい水だな。」と思いながら、今日も、明日も私は、泳ぎます。

「僕たちの水」

熊本県　倉岳町立倉岳中学校
三年　森　田　大　介

皆さんは、山から流れてくる水を飲んだことはありますか。僕は毎日おいしい山水を飲んでいます。僕が住んでいる南平地区では、天草一高い倉岳山から流れてくる山水を利用して生活しています。

南平地区には、水道組合というものがあり、十四軒で山水を分け合っています。父の話によると水道組合の歴史は四十年程前、ちょうど父が中学生位の時に始まったと聞きました。その頃は、まだ井戸から水をくみ上げて使っていたので、とてもきつかったということでした。

そこで、山水を各家庭に引こうということになったそうです。当時の南平地区の人々たちは、セメントやブロックをかついで行き、作業を行い、水槽などを作り上げた結果、各家庭に山水を引けるようになりました。その水槽には、炭や砂・砂利を入れて、ろ過作業を行っていて、今まで一度も消毒をしたことがないそうです。そのかわりに、毎月水道当番を決め、水槽の点検をしたり、毎年一回の清掃活動をして水槽をきれいに保っています。これには、僕も四十年間よく続いてきたなと、とても驚き感心しています。このように活動が続いているおかげで、山水と町の水は大きく違うと母から聞きました。町の水は、塩素などで消毒してあるため、臭いがとても気になるそうです。それはお茶などを沸かした時に、分かるということでした。母からの話を聞いて、町の水と山水は全然違うんだなと思いました。

このようなおいしい山水や水道組合を保っていくには、どうしたらいいのかを考えてみました。僕は、まず倉岳山から流れ出るきれいな水を、絶やさないようにすることが大事だと思います。そのためには、倉岳山の自然を大切にすることが必要です。山に少しごみが捨てられるだけでも水は汚染されると思うし伐採などによって木を失くしてしまうと山が水を貯められなくなったり、汚染が目立つようになると思います。だから、呼びかけや自覚が大切になると思います。二つ目に、水道組合を保っていくという気持ちが大事だと思います。そして、気持ちだけでなく南平地区全体のコミュニケーションをとって、清掃活動などをしっかりしていくことが必要だと思いました。

また、感謝の気持ちも忘れてはいけません。南平地区では、「水道寄り」という報告会があります。「水道寄り」では、水が正常に流れているか、水のたまり具合はどうかなどを報告します。その時、一番遅くに出席した人が乾杯のあいさつをすることに決まっています。その時の決まり文句は、

「皆さんで倉岳山の水を飲むことができることに感謝して、いつまでも清い水が流れますように。」

と倉岳山に感謝をしているということです。僕は、その話を聞いて、やはり倉岳山の水を飲ませてもらっているという感謝の気持ちが一番大切なんだなと感じました。

また、七・八年前、雨が降らずダムもかれていた時期がありました。町の水を使っている人は一カ月近く給水制になったり、断水になったりして大変そうでしたが、南平地区は山水を利用していたため、三日間水が出なくなっただけでした。このことから僕は、山水を使うことの便利さを感じました。

いつも山水を飲めることに本当に感謝しなければならないと思いました。この感謝の気持ちと水の大切さを忘れずに、倉岳の水源を守っていこうと思いました。

「大切な水」

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校
一年　神田貴央

「牛を苦しませたらいかん。がんばるか。」父も母も祖父も祖母も、みんな激しい雨や風の中、一生懸命に水をくみ続けました。外は台風で、木々が荒れ狂うようにゆれています。台風で停電し、家の中の生活も困ったのですが、一番困ったのは、飼っている二百頭の牛たちの飲み水を地下から吸い出す機械も動かなくなってしまったことです。僕が小学校六年生の雨期のことでした。

家族みんなで水をタンクにくんで入れても牛は人間の三倍以上体が大きいので、何度入れても足りません。朝から大人は水をくみ続け、お昼になって、やっと家に帰ってきたけれど、お昼ごはんを食べると、またすぐ牛舎に行って、水をくみ続けていました。この作業が終わったのは、午後六時ごろでした。

僕も水がとまっているので、大切に大切に水を使いました。こんなに一滴の水にも気をつかって使ったことはありませんでした。

今まで、牛舎では、牛が水を飲めば勝手に出てきていました。何も考えることもなく、いつも水はある、と思っていました。しかし、こんな災害にであって、牛の命のために、こんなにも大量の水が使われていたことに驚きました。そして、ただぼーと見つめることしか出来なかったことや、今まで水を粗末にあつかっていたことを、情けなく思いました。

僕の家にとって、こんなにも大切だった水。僕は水をこれまでどれだけ粗末にしてきたことでしょう。例えば水を出しっぱなしにしていたり、意味もなく水を出したりしていました。

今思うともっともっと水を大切にしなければいけないなあ、と強く反省します。

僕自身は、今回のことがあるまで、水の大切さをあまり分からないでいたけれど、日本人は昔から水を大切にしていたんだろうなあと気づいたことがありました。それは、僕の家の近くに観音様があるからです。

この出水観音には、名前のとおり、わき水がわいています。そして、それは奈良時代のころからあったとされています。昔の人は、水を観音様としてお祀りするのだから、本当に水を大切にしていたのだなあと思いました。そして、水だけでなく、自然も大切にしていたから、今になるまでわき水がかれることがなかったのでしょう。

今、日本人は、どれだけ水や自然を大切にできているでしょうか。水はあってあたりまえと思っていないでしょうか。また水をつくり出す自然を破壊しながら、自然を守ろうと口だけでいっていないでしょうか。水を大切にするには、自然を守っていく必要があります。水や自然といっしょに歩いていく気持ちがあれば、台風や地震といった災害とも上手につきあっていけるようになると思います。

この大切な地球を守るためには、まずこのきれいな大切な水を守らなければならないと僕は思います。

「かけがえのないもの」

鹿児島県　三島村立三島中学校
三年　小野原　三　誉

「硫黄島の水のために、皆さん節水にご協力下さい。」

これは、島に新しくキャンプ施設ができたとき、地区の奉仕作業の後に議員さんが呼びかけていた言葉です。私は、その言葉を聞くまで自分が生活している島の水のことなど考えたこともありませんでした。そして、硫黄島には、水がそんなに少ないのだろうかと不安になりました。

その後、議員さんの言っていたことが気になり、地区の方に島の水事情についてお聞きしました。今のような水道設備ができるまでは、井戸に頼っていたそうです。そしてその井戸の水も、塩分を含んでいて、今のように自由においしい水を飲むことはできなかったそうです。一回お風呂に入るのにも、お湯が熱かったら、井戸までわざわざ水を汲みに行き、温度調節をしなければならないという不自由な思いをしていたということでした。また、島には井戸が数ヵ所しかないので重い水を運ぶのにとても苦労したそうです。でも、そんな貴重な水だからこそ、昔の人は大切に使っていたと話してくださいました。水道水ができてからも、水に塩分が含まれていて、今までに水源地を三回も変えていたということが分かりました。昔の人が苦労して探してくれたからこそ、私たちは自由にそして安全に水を使うことができるのだということを初めて知りました。

島に新しくできた冒険ランドというキャンプの施設には、たくさんの人がやって来ます。水を使う人が多くなると、水不足になるのではないだろうか、と施設ができる前はとても心配されていたそうです。でも、冒険ランドができたあとも、水不足になることはありませんでした。調べてみると、そこでは飲料水以外の水は、再利用されるという工夫がしてありました。また、水の出しっぱなしがないように、人が蛇口から離れると水道水が自動的に止まるような、仕組みも使われていました。

新しくできた施設では、そのような工夫がされていますが、私たち一人ひとりの水に対する考え方はどうでしょう。今、硫黄島には約八十人の人が住んでいますが、昔のように水を大切に使っているでしょうか。また、水の大切さについて考えている人がどれくらいいるでしょうか。周りを海に囲まれたこの島で、もし水がなくなったらどうなるでしょう。

私たちが住んでいる硫黄島には昔、今よりもたくさんの人たちが暮らしていました。でも、使う水の量を比べてみると、今の私たちの方が水をたくさん使っていると思います。このまま私たちが水のことなど何も意識せず使い続けたら硫黄島の水はどうなるでしょう。今の水源地は、竹に覆われた稲村岳という山にありますが、その山は昔から木の伐採や開発など、人の手を加えていないそうです。神聖な山として人もあまり出入りしていないその山は、山自体が自然のダムになっています。硫黄島の集落からは一番近く、島民にとって身近なはずの山なのに、人が立ち入らないのには理由があります。硫黄島の水は塩分を含んでいるので、そう簡単に水源地を変えることはできません。だから、貴重な水を汚したり、竹を切ったりしないことで天然のダムを壊さないようにしてきたのです。

私たちの生活から水がなくなると何もできなくなります。料理や飲料水、洗濯、お風呂。考えただけでもたくさんの場面で水を使っています。普段何気なく使っている水ですが、その水を使えるのは、昔、島に住んでいた人の苦労や知恵があったからです。また、水資源にも限りがあります。だからこそ、一人ひとりが水の大切さについて考えなければいけないと思います。そして私たちに欠かせないものである水が自由に安全に使えることに感謝し、行動していかなければならないのです。

「命を守る水」

鹿児島県　垂水市立大野中学校
三年　迫田　和

今でも忘れられないことがある。四、五年前のことだ。僕が小学五年の夏の頃だった。朝起きると、父が大声で言った。

「今日の水は、飲んじゃいかん。」

と。蛇口を捻るとびっくりした。中から濁った水が出てきたのだ。きっと昨夜はかなりの雨が降ったのだろう。

僕の住んでいる垂水の大野地区は、水源地から水を引いている。激しい雨が降った後は、水道の水が濁ったりする。垂水市街地や平地にある町の水道とは、だいぶ違うと思う。

そんなときには、母は大変だ。前もって水道の水を溜めて置き、それを沸かし、僕たち子供が飲めるようにしなければならない。せっかく母が沸かしてくれたお湯だから、少しずつ、少しずつ大切に使う。幼い頃の僕は、それが分からず、よく水をこぼして、父や母に怒られたものだ。顔を洗い終わると、父が怒鳴るように、

「水源地に行くぞ。掃除だ。早く朝飯食べろ。」

と言いながら、もう出かける準備を済ませている。

「こりゃ、そうとう汚れているぞ。はよ行かんないかん。お前たちも手伝え」

と、強い口調でいった。

当時、父は地区の水道会長をしていた。責任上水源地を守る立場だ。せっかくの休みだったが、そんなもの吹き飛んでしまった。普通の水道であれば、水が濁ったりすると、市役所に電話して、後は自分たちは、水がきれいになるのを待つだけでいい。しかし、僕たちの住んでいる大野は、そうはいかない。自分達で作った水源地は、自分達で守らなくてはならないのだ。水源地は、大野の宝だ、大野の命だ。人の命と同じ位大事なものだ。どんなことがあっても水を絶やしちゃ行かん。大野に、最初に入植された進じいさんの言葉を思い出す。

僕たちは、朝の六時過ぎから、父の先導で山道を兄と三人で登っていった。険しい崖っ淵を通り、ようやく水源地に着いた。そこは雨や強風のせいで枯葉や泥が詰まって、水がせき止められていた。それらを取り除き、辺りについている苔を、ブラシで落とした。水を含んでいたので、とても重かった。

そして、水源地の掃除を終え、次の貯水池に向った。休む間もなく直ちに水を抜くことから始めた。抜き終わると、中の掃除だ。タンクはとても大きく、深くて幅もある。五十トンもの水の入る広さだ。そして、かなり暗い。ライトを点けながら、ブラシで隅々まで擦る。腕が疲れてくる。手首が痛くなる。もう帰りたい。家でテレビを見ている人のことを考えると「なんで自分だけ」と思ったりもした。

でも、終わった後は、心の中まで洗われたような気持ちになった。何ともいえない爽快な気分だ。「大野の水源地を、僕たちは守ったぞ。大野の人達の宝を守ったぞ。ちょっとやそっとの雨や風には、負けないぞ」と、そんな気持ちになったのだ。全部のタンクをやり終えた頃には、もう夕暮れになっていた。

家に帰り、僕は一人になり考えた。明日からは、また蛇口を捻ると水が直ぐ飲めるだろう。しかし、最初に入植された進じいさんの頃は、何キロも離れた谷底まで、桶を担いで、一回一回水汲みに行ったという。まだランプもなかったため、夜は月の光を頼りに、木にぶつかり、坂でよろけ、汲んだ水は半分になっていたという。家族の人にとっては、神様からもらった宝物のように思えた。命がけでも取りにいかなければ、生きていけないのが水なのだ。

僕は、この「命を守る水」、「恵みの水」を絶やさない為に、これからも大野の人達と共に、水源地を守り抜くつもりだ。